

お釈迦さま～その出家～

平成26年10月第3週放送

お釈迦さまは、約二千五百年前に実在し、八十歳まで生きた方です。その人生は、さまざまな資料によりわかってきています。

お釈迦さまの父は、ヒマラヤ山脈の山麓^{さんろく}地帯にあった釈迦国の国王であるスドーダナ、お母さまは王妃^{おうひ}のマーヤーと申します。マーヤーはお釈迦さまを産んで、七日目に亡くなりました。その後、マーヤーの妹であるマハーパジャパティが新たに王妃となり、お釈迦さまを育てました。

王子として育ったお釈迦さまは物思いにふけることが好きな性^{しょうぶん}分であったそうです。

ある日のこと、お釈迦さまは郊外^{こうがい}で過ごそうと王宮を出ました。すると門外の路上^{はくはつ}に、白髪で腰が曲がって、歯^{からだ}が抜け落ち身体の震える老人の姿を見ます。それまでそのような老人を見たことが無かったお釈迦さまは、お付きの者^{もの}に「あれは何者^{なにもの}か」と尋ね、誰しもやがては老いて同じようになることを知ります。

後日、また王宮を出ると、今度は苦痛^{くつう}にもだえ、倒れる病人を見ます。お付きの者に尋ね、誰しもやがては病人になることを知ります。

さらにまた後日王宮を出ると、人々が亡骸^{なきから}に火葬の準備をしている場面に出くわします。そして、誰しもやがて必ず亡くなることを知ります。

この出来事を通して、お釈迦さまは「生まれたものに老いること、病^{やまい}になること、亡^なくなることがあるのならば、生まれることも、自分の思いどおりにならない苦しみである」と考えるようになります。

そしてある日王宮を出ると、出家者の姿を見かけます。お付きの者に尋ね、道を求めて修行をする出家者という生き方を知り、心^{こころひ}惹かれ、次第に出家を望むようになります。

出家の望みを抱えながらお釈迦さまは結婚され、十数年後にラーフラと名付ける男の子が生まれます。跡継ぎを授かったお釈迦さまは、二十九歳のある夜、家族に告げずに王宮を出て出家修行の生活に入ります。

お釈迦さまのこの二十九歳の決断が無ければ、今我々はそのみ教えにふれることはなかったでしょう。

私たちと同じ人間であるお釈迦さまの道を求める修行の生活は、このようにして
始まりました。

— 終 —